

富嶽湯景

- 稜線に託す継承のかたち -

私たちが問うべきは、“富士山の存在そのもの”なのではないか。



Phase.01: 銭湯における富士の存在

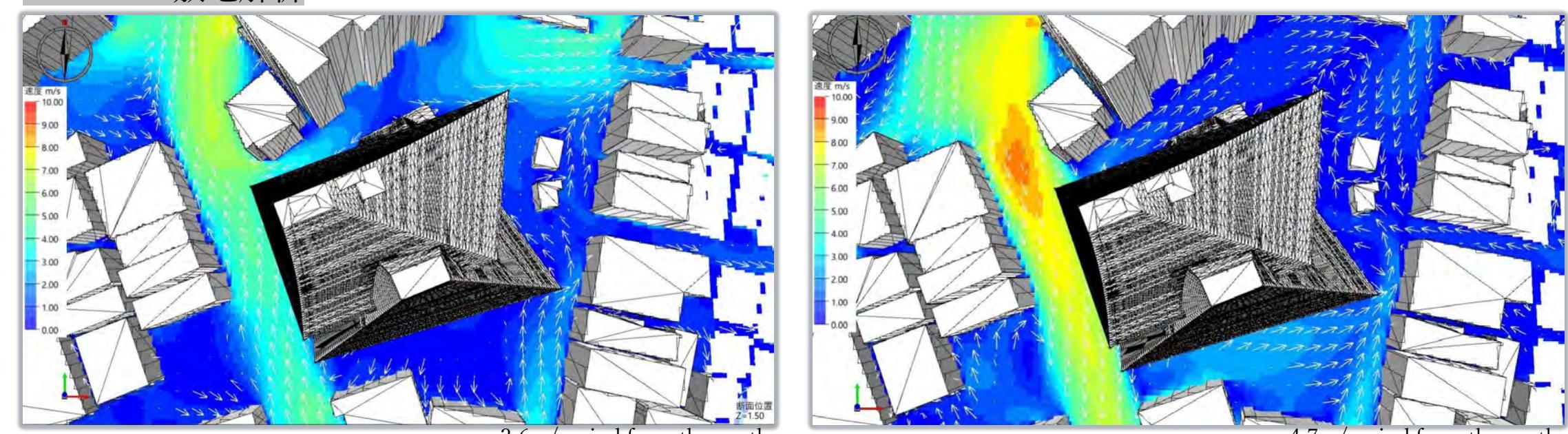
古代から国を守り鎮める神として信仰されてきた富士山。時代が進むにつれ、旅の目的地や形式として、形態的な美しさに対する評価が加わり、富岳三十六景など多くの文学・美術作品に富士山を取り上げられた。富士講と呼ばれる富士山を信仰する宗教が江戸時代に流行り、昭和初期まで続いた。昭和になり出現した銭湯の壁に富士山を描くことが人気になったのも信仰心が関係している。富士山は時代を越えて、表現の中に繰り返し現れる。それは、常に“そこにあるもの”として、人々の心の奥に静かに宿ってきた証ではないか。現代になり、銭湯文化がなくなりつつあるなか、同時に我々日本人の心に居続ける富士の絵もなくなろうとしている。しかし私たちにとって富士山は見るだけではなく心で仰ぐ風景である。見えないが、そこにある。そんな“背中の山”的気配を、この建築にそっと沈ませた。

Phase.02: 関東に根付く銭湯文化

銭湯の壁の富士山の始まりは、キカイ湯という銭湯で、子供たちを喜ばせるために壁画を描くことになり、その際の画家が静岡県出身であることもあり、故郷でよくみられる富士の姿を描いたものだった。縁起がいい富士山のベンキ絵は次第に周辺の銭湯に広まっていく。

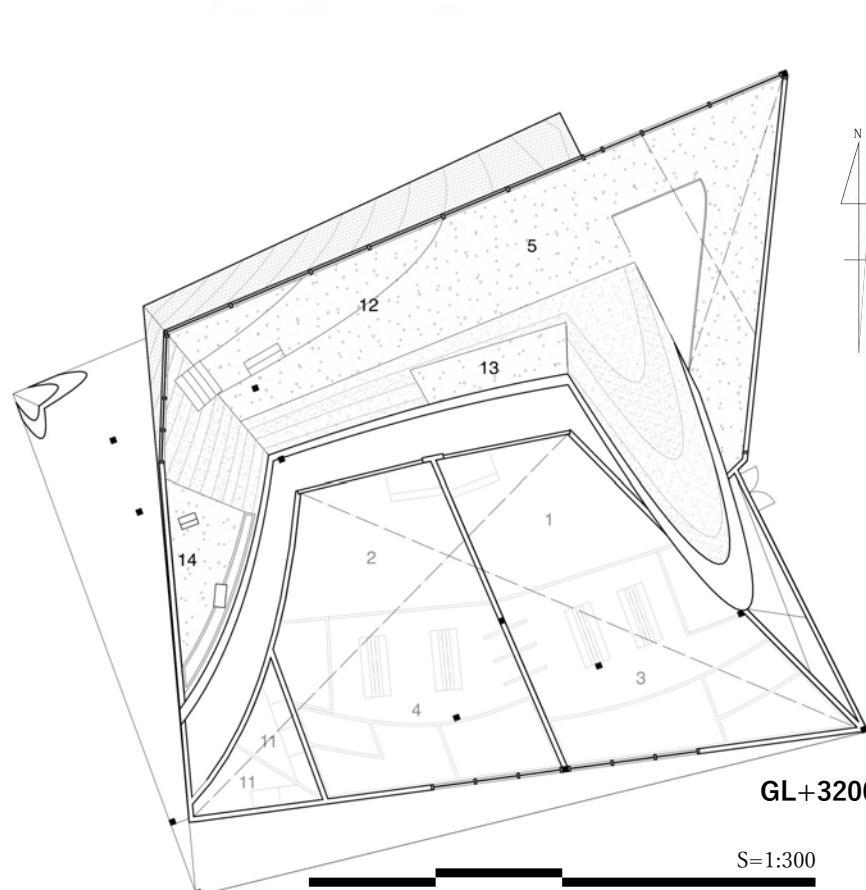
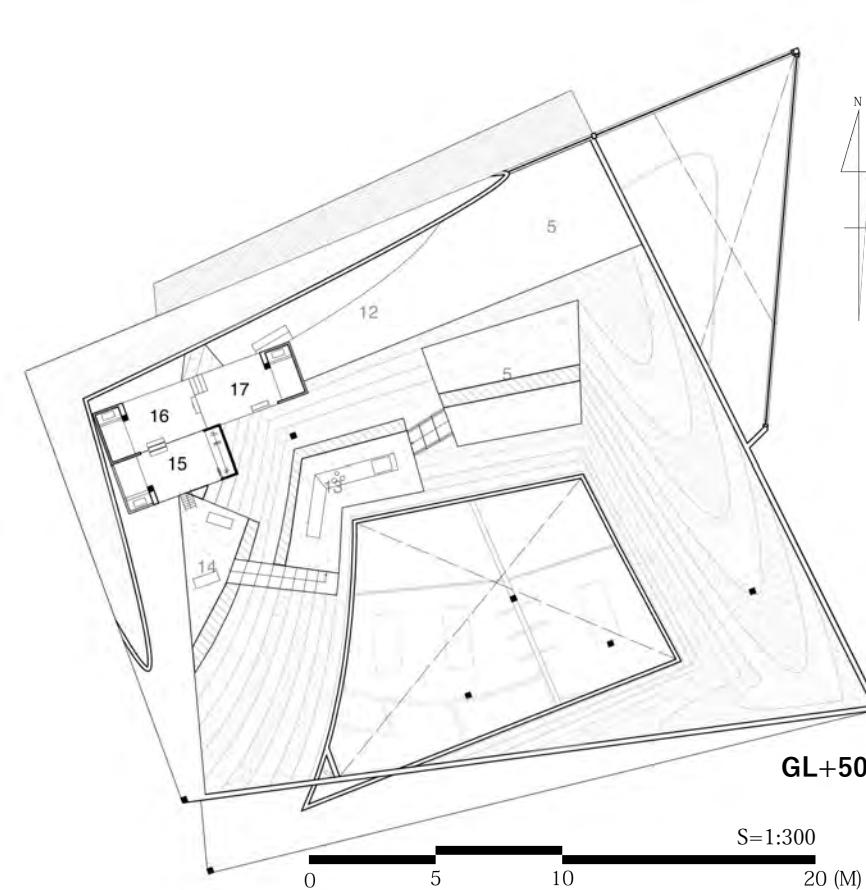
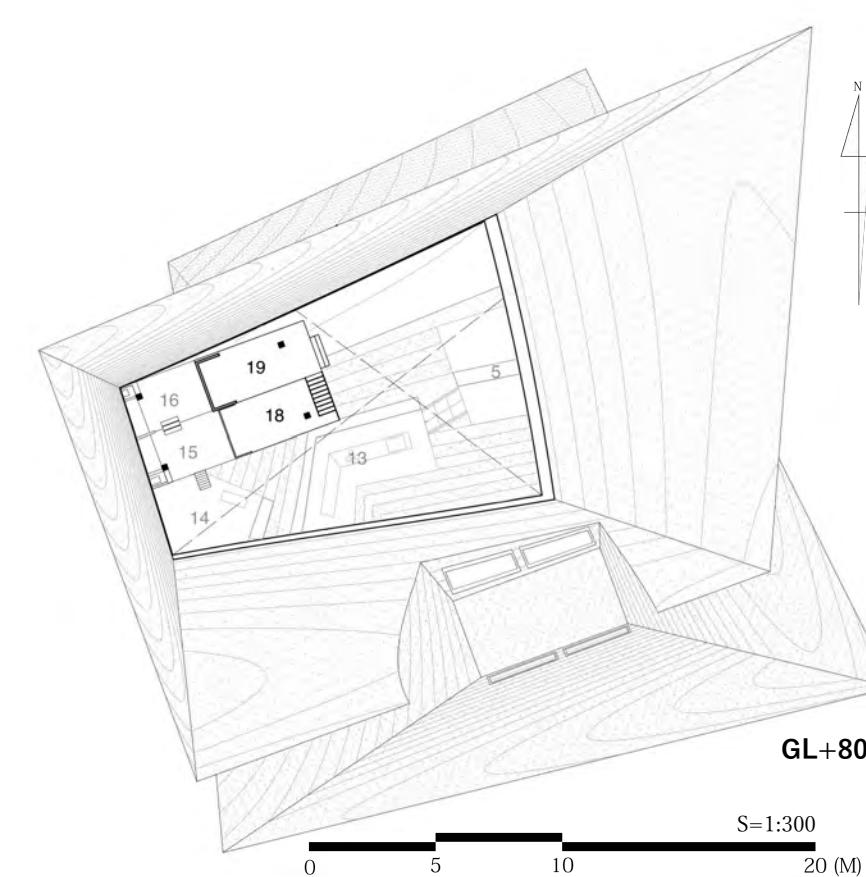
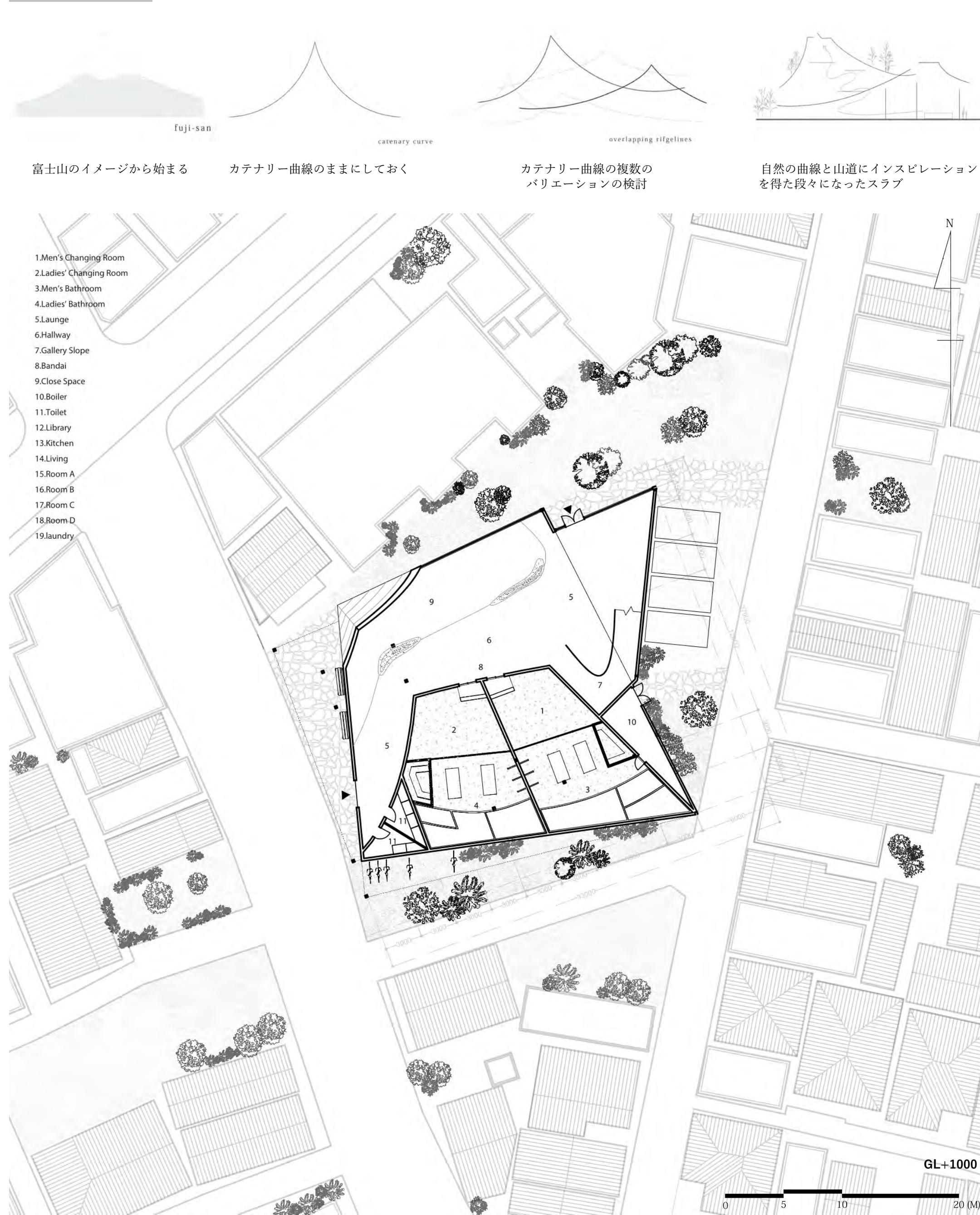


Phase.03: 敷地解析



夏季は南～南東からの暖かく穏やかな風が吹き、南からの風が銭湯の西側の道路に沿って強く吹き込む。また、北側の建物の影響により、南から吹く風は反転し、温かい北風となって公園と銭湯を南へ抜ける。冬季は北北西から冷たく乾いた風がよく吹き、北風が道路に流れ込み、建物南側や北側の空間にはあまり風が入らなくなる。

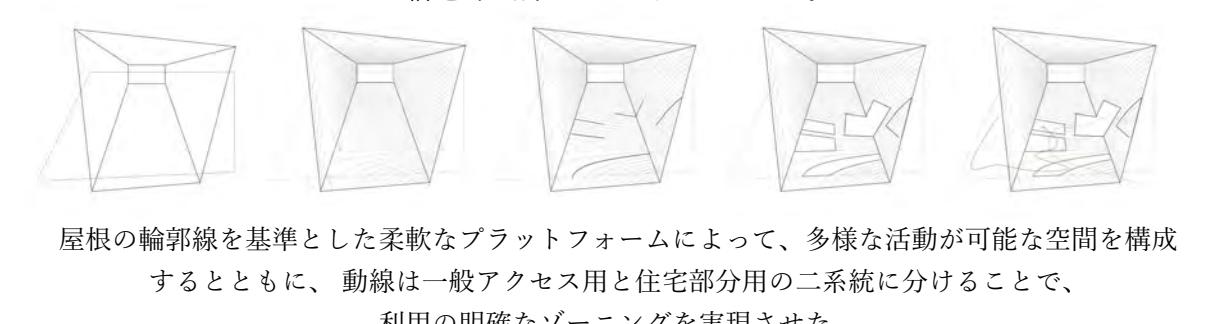
Phase.04: 設計



Phase.05: 稜線から描かれた構造



富士屋根を支える柱は、 $3000 \times 3000\text{mm}$ のグリッド上に配置し、構造的に成立つようしている。



屋根の輪郭線を基準とした柔軟なプラットフォームによって、多様な活動が可能な空間を構成するとともに、動線は一般アクセス用と住宅部分用の二系統に分けることで、利用の明確なゾーニングを実現させた。

構造用合板

木枠の上に構造用合板を貼る

木材

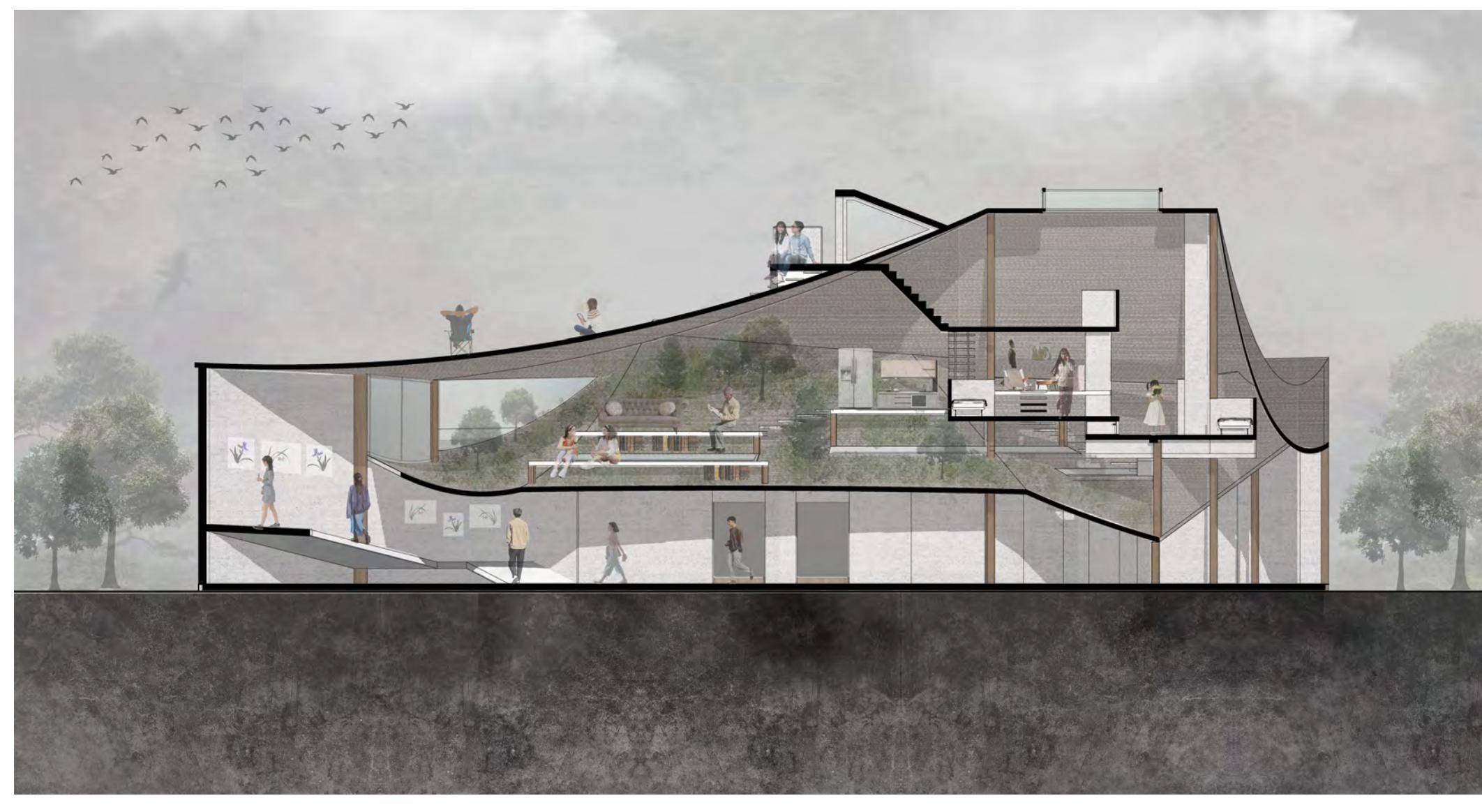
屋根に剛性を持たせる

鉄骨フレーム

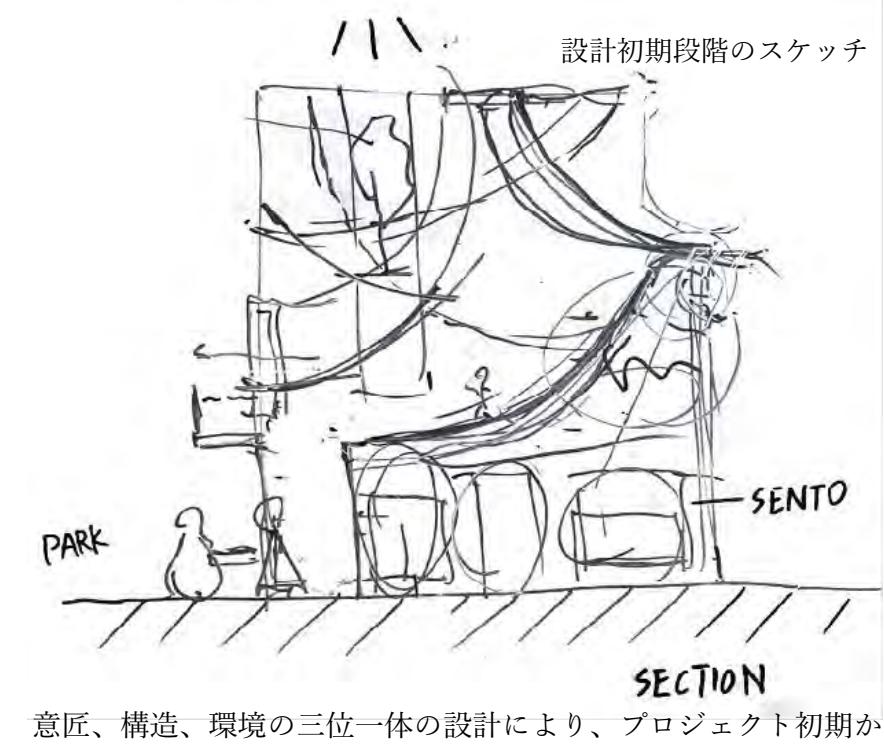
屋根の基礎となり、木材を支える

鉄筋コンクリート壁

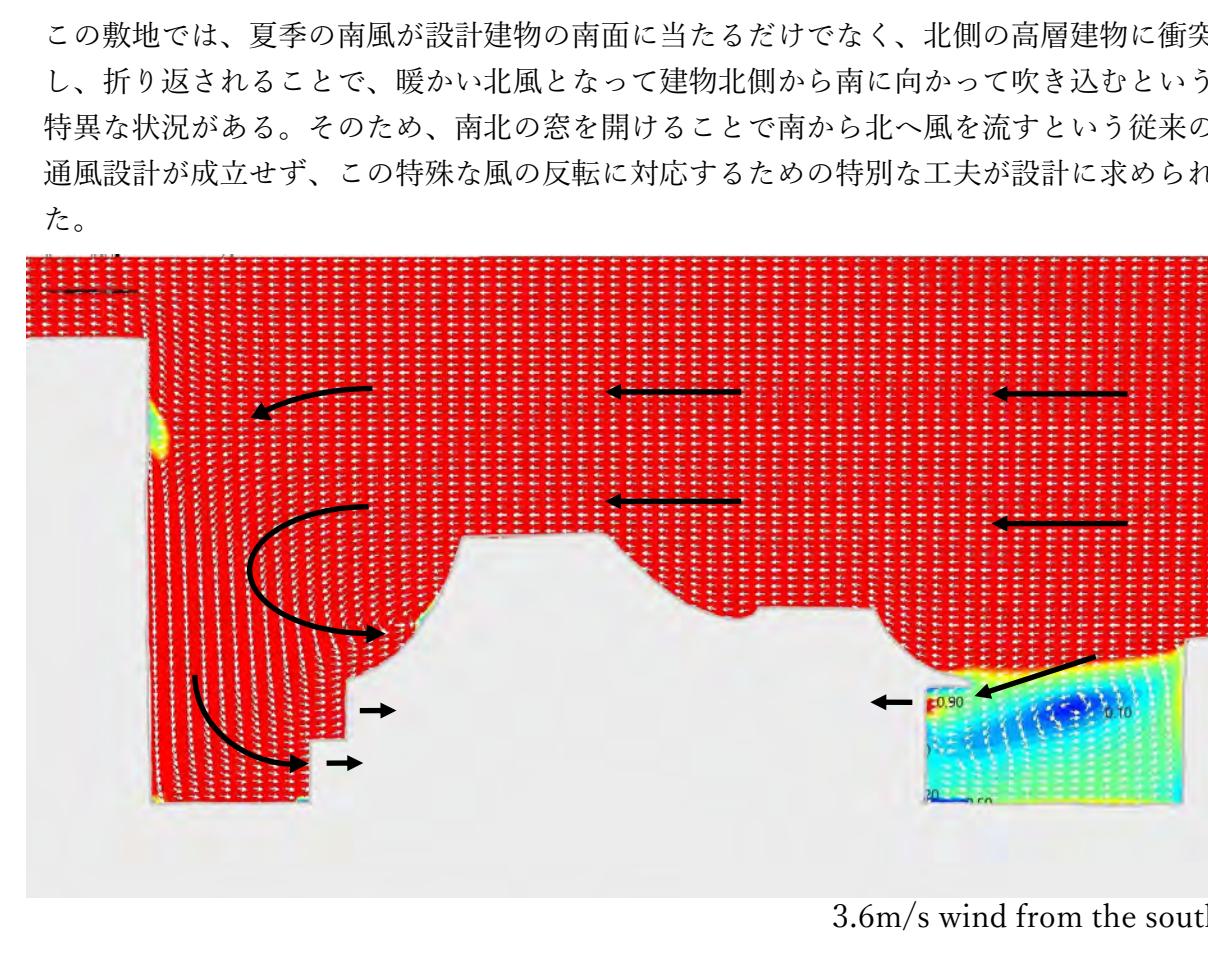
RC壁で低い富士屋根を支える



Phase.06: 設計プロセス

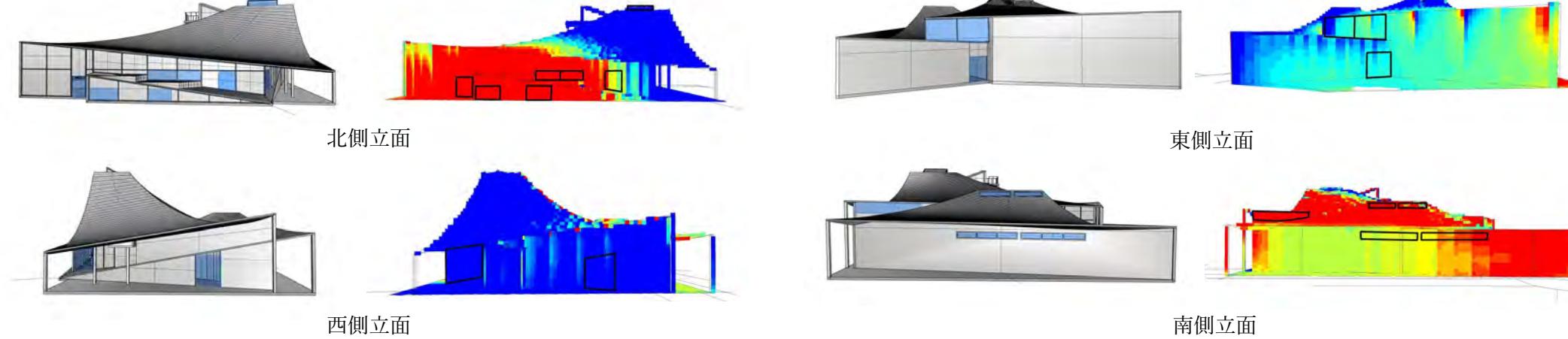


Phase.07: 敷地の特異的な風環境



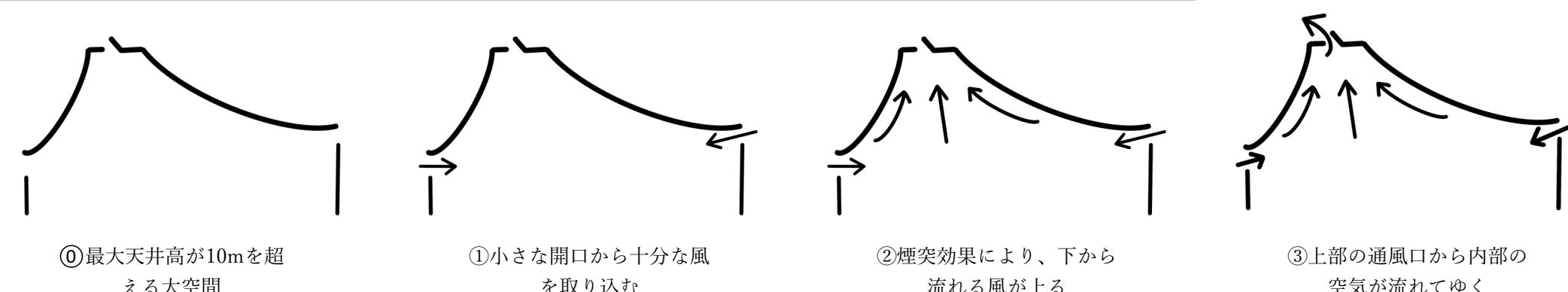
意匠、構造、環境の三位一体の設計により、プロジェクト初期から各分野が大胆かつ効率的な設計ができた。象徴的な富士の稜線は、デザイン上の美しさを追求しつつも、構造的に実現しやすく、かつ効率的な換気計画を可能にするよう、綿密な調整を経てその形が決定された。

Phase.08: 開口部検討



自然の風を最大限に活かすため、建物に当たる風の圧力（正圧・負圧）を解析し、風を効率的に取り込める窓の位置と、室内の空気をスムーズに排出できる面を見極め、窓を効果的に配置する。季節に合わせて窓の開け方を調整することで、一年を通して快適な室内環境を創り出す。

Phase.09: ベンチュリー効果と煙突効果を組み合わせた換気計画の検討結果

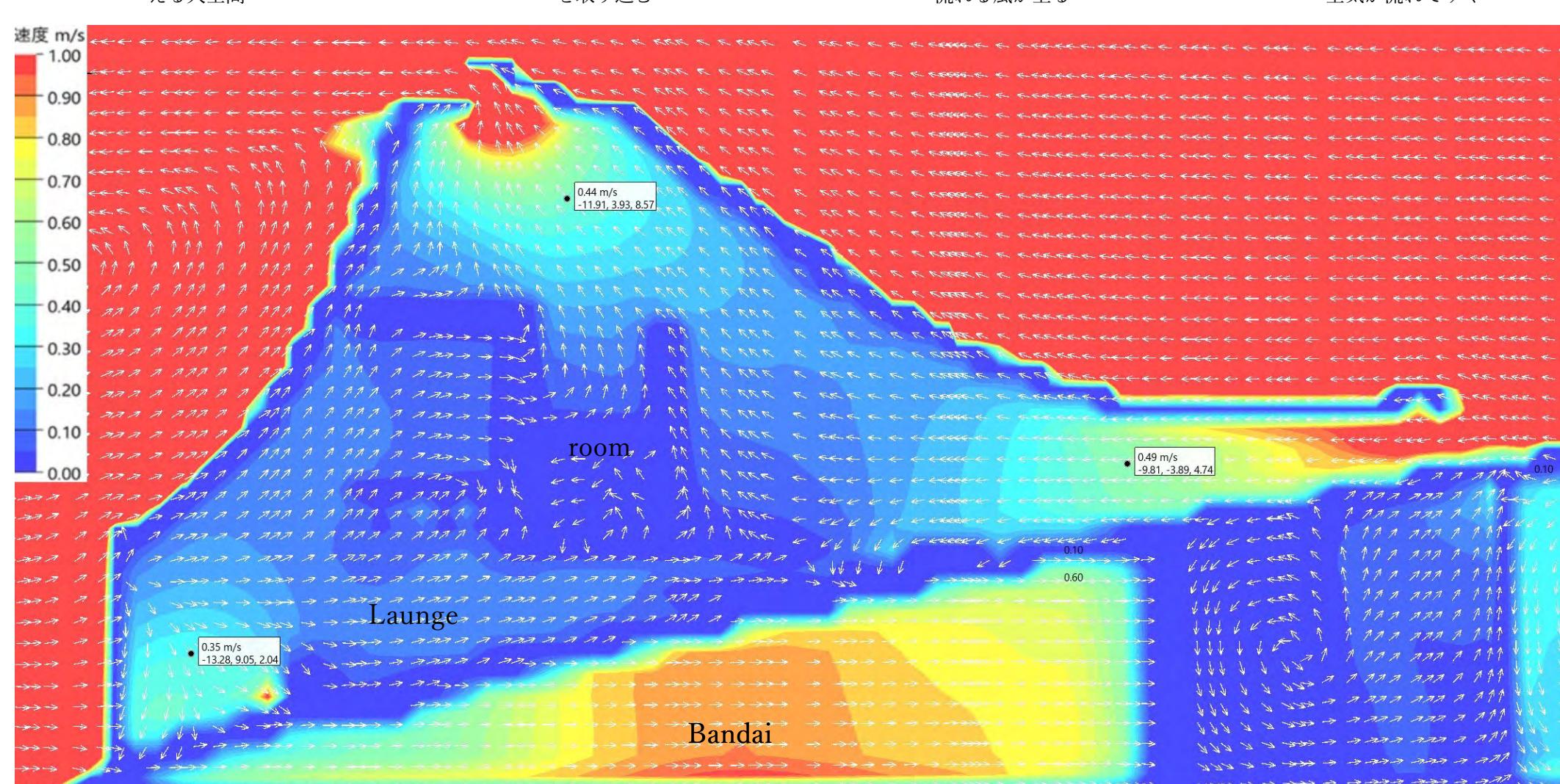


①最大天井高が10mを超える大空間

①小さな開口から十分な風を取り込む

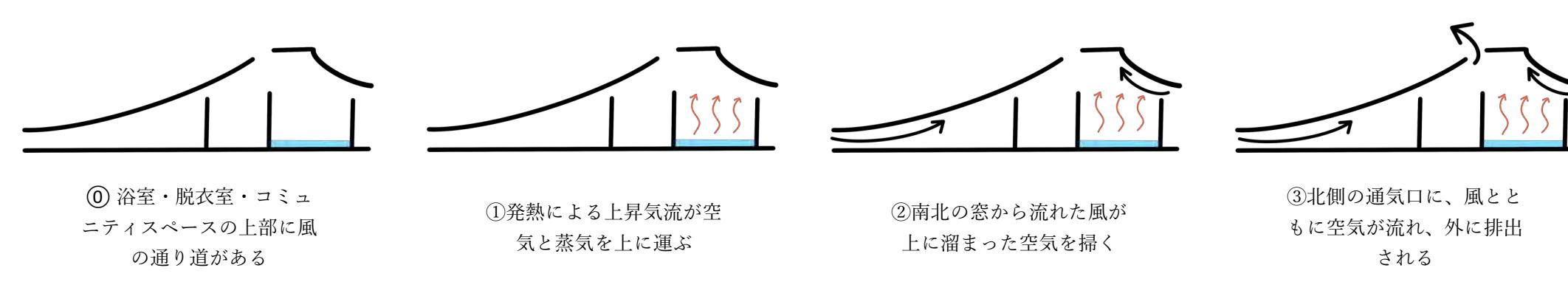
②煙突効果により、下から流れる風が止る

③上部の通気口から空気が流れゆく



この空間では、ベンチュリー効果によって小さい開口部からでも十分な通風量を確保し、さらに、窓の高低差を利用した煙突効果が自然な空気の流れをつくり出し、大空間全体の換気を可能とする。

Phase.10: 上昇気流と温度差による気流を利用した浴室の換気計画の検討

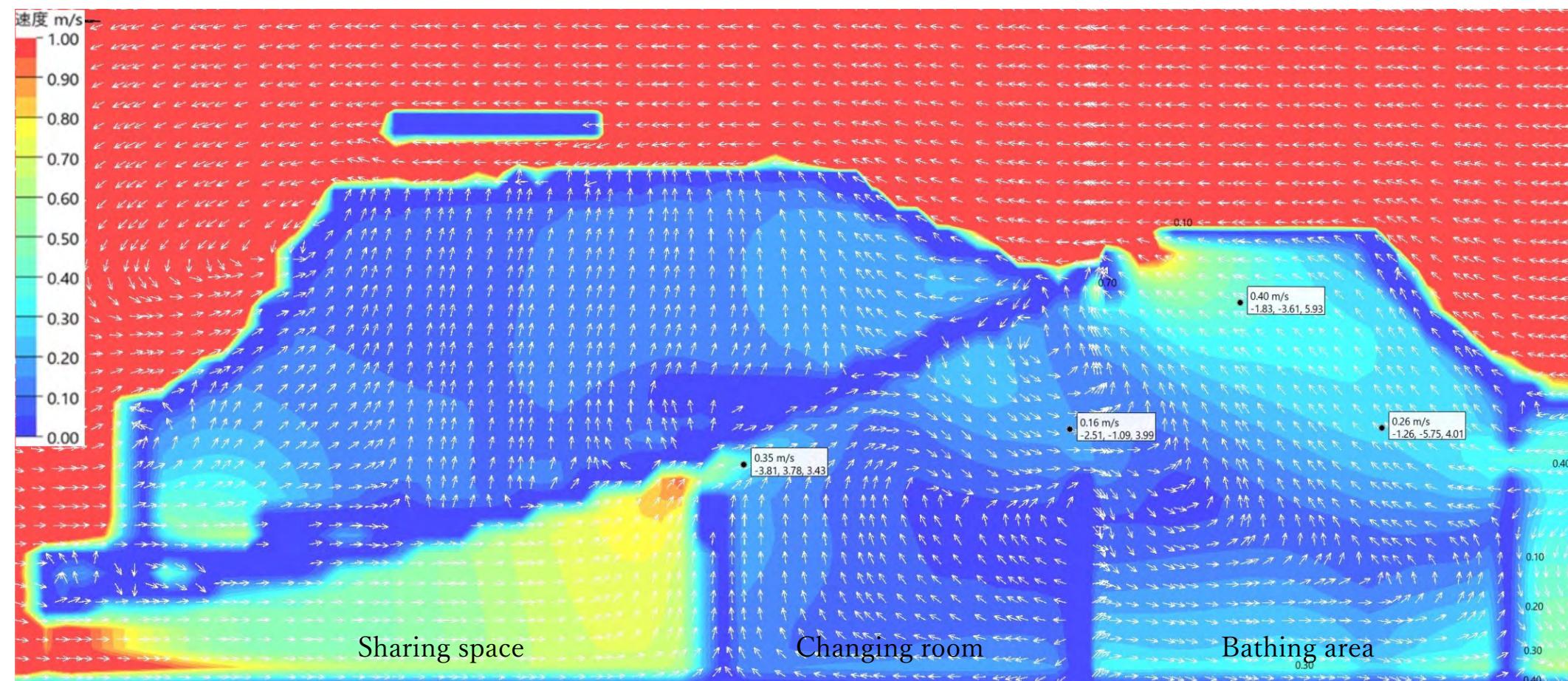


①浴室・脱衣室・コミュニティスペースの上部に風の通り道がある

①発熱による上昇気流が空気と蒸気を上に運ぶ

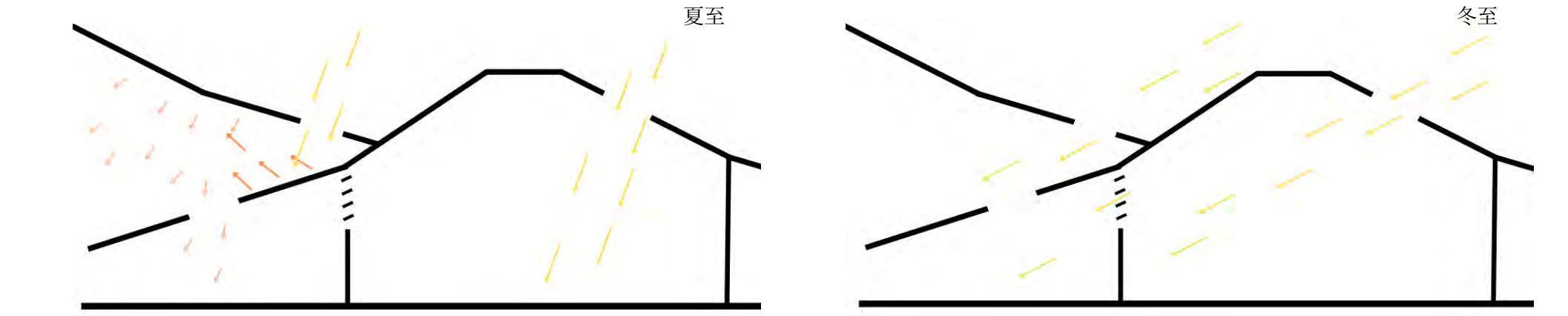
②南北の窓かられた風が上に溜まつた空気を掃く

③北側の通気口に、風とともに空気が流れ、外に排出される

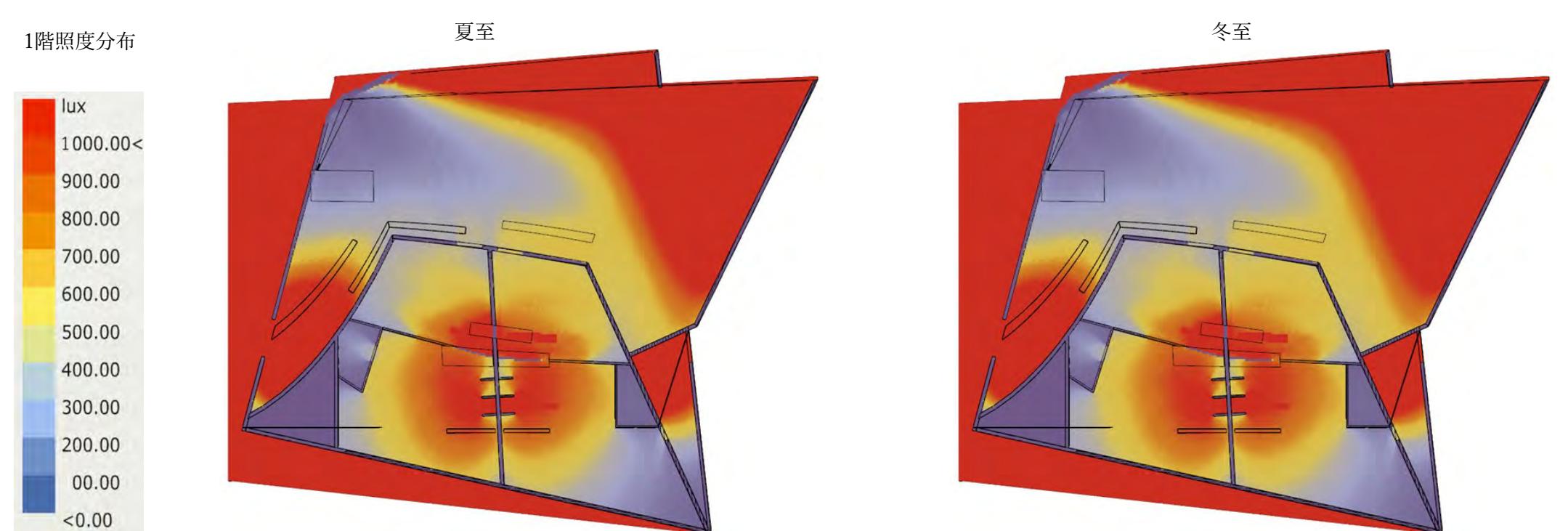
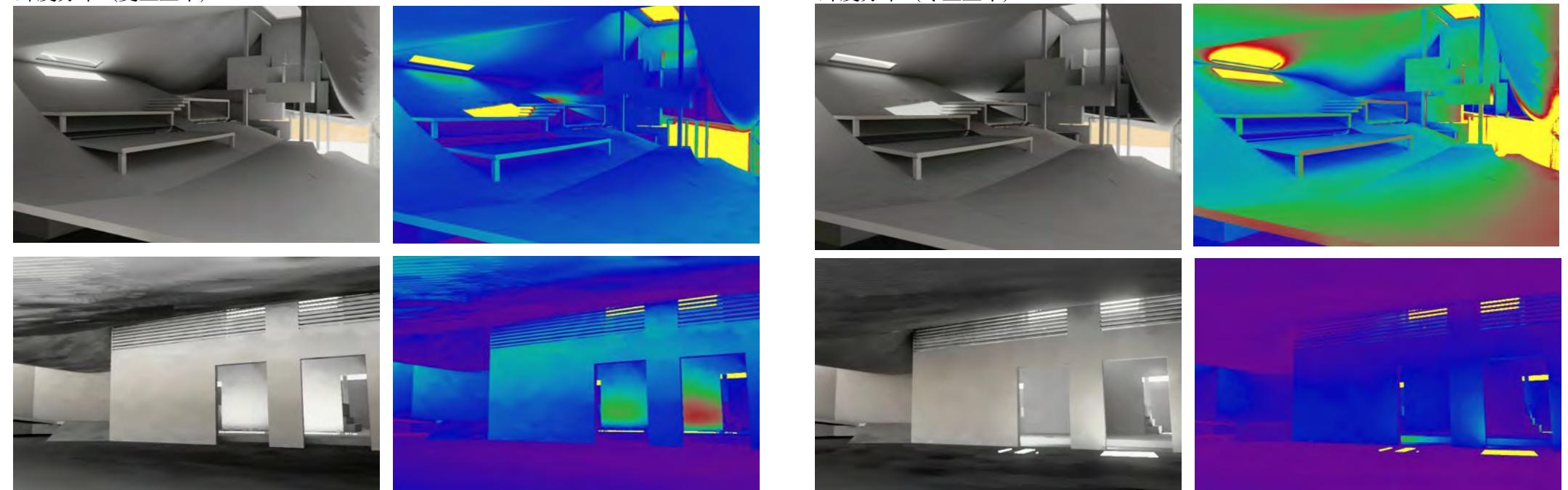


浴室の床や湯船から発生する対流が蒸気や熱を上に運び、屋根に沿って吹く風の力を利用し、頂部に設けた開口部から効率的に排出する。この仕組みにより、利用者に直接風や蒸気が当たることなく、空間全体を快適に換気できる。

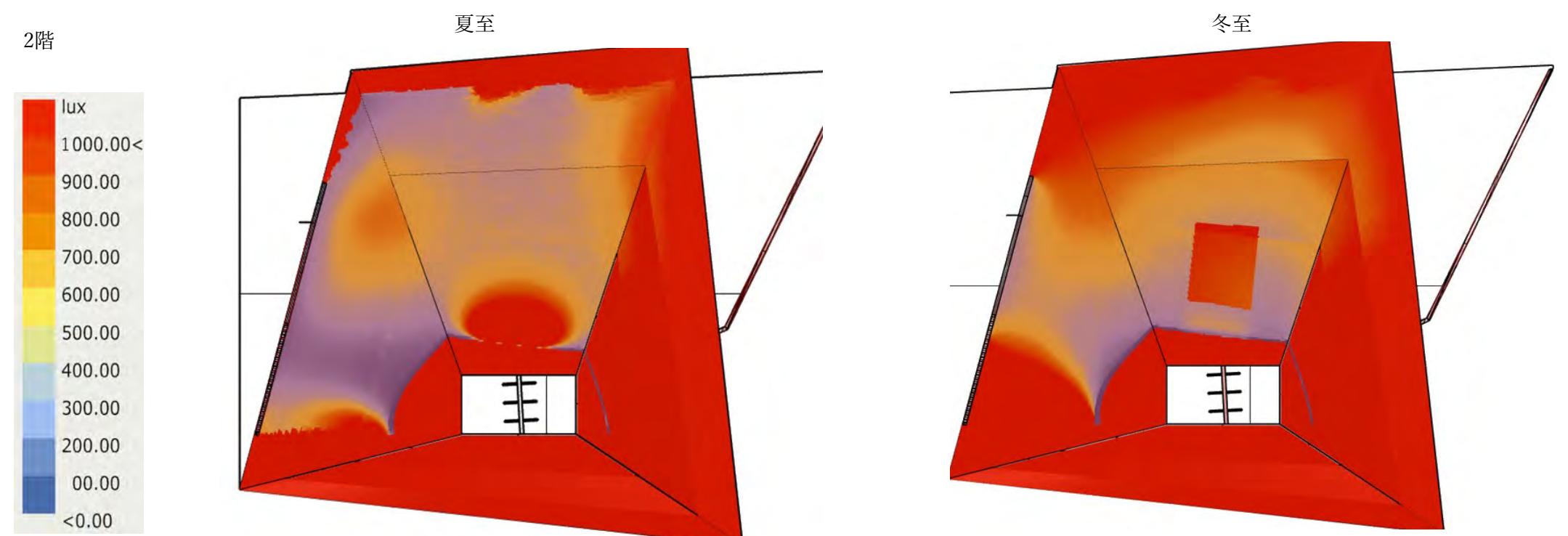
Phase.11: 昼光利用計画



稜線の隙間から漏れる光が、時間の経過とともに空間内に表情の変化をもたらし、訪れる人に移ろいゆく光の豊かさを感じさせる。



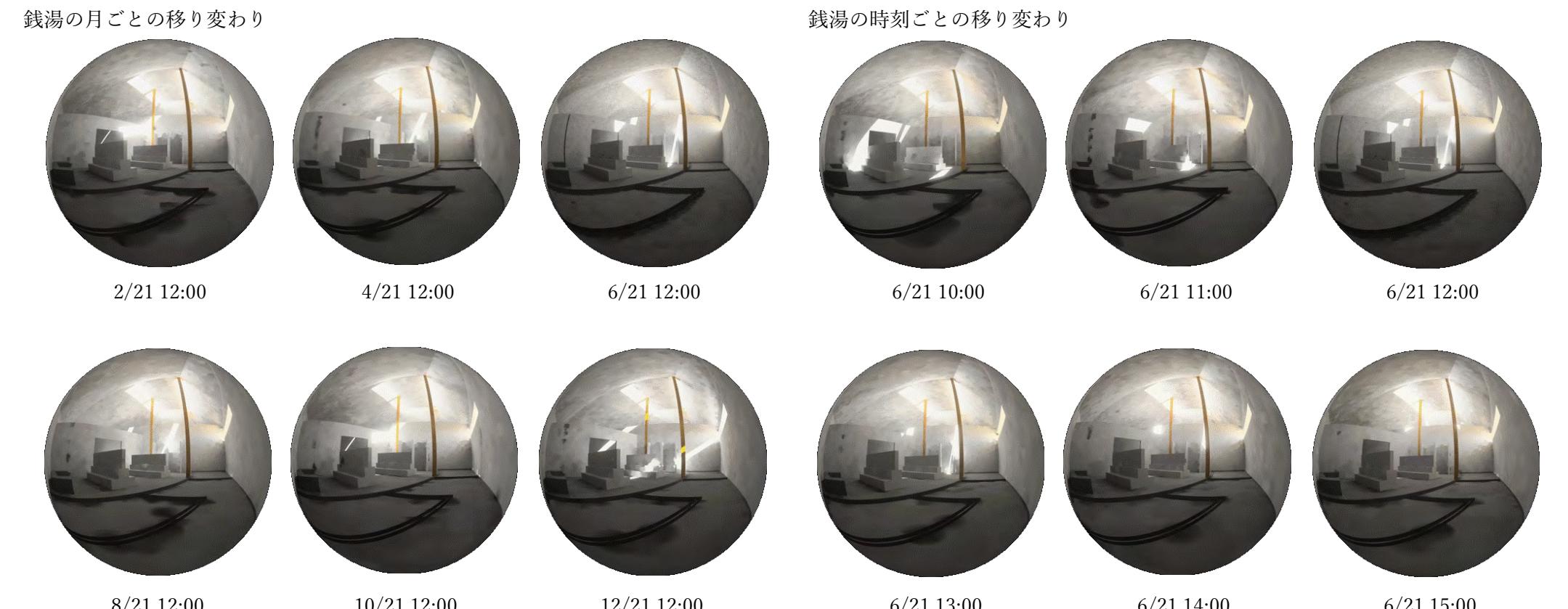
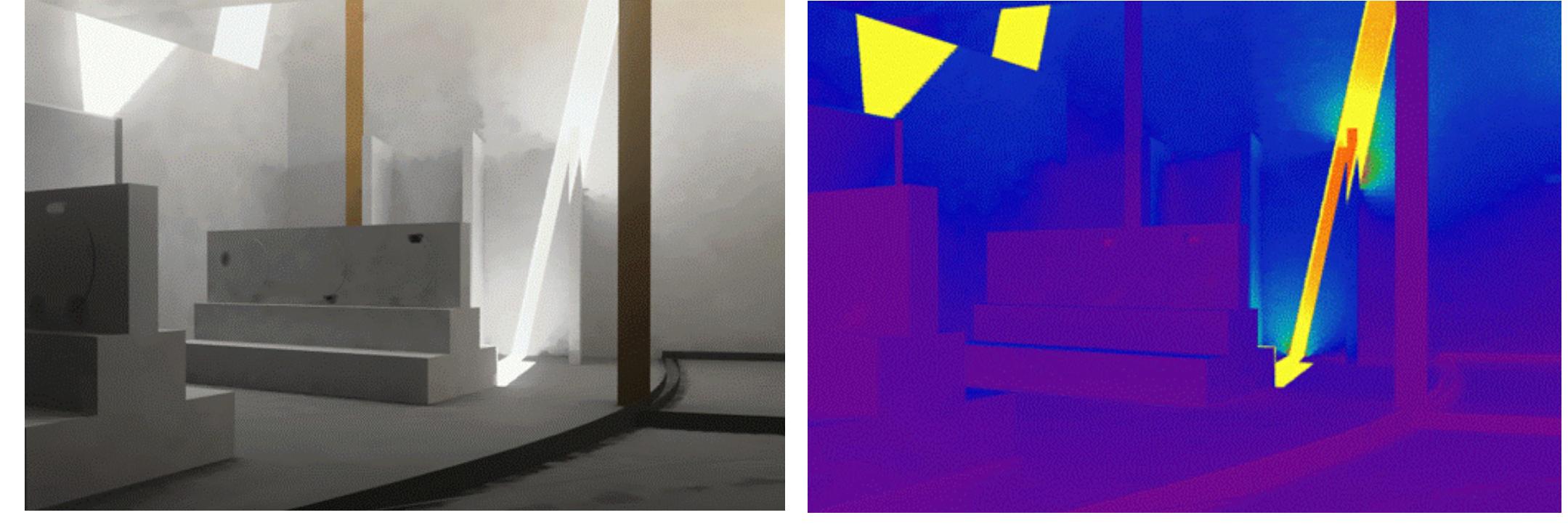
銭湯は天窓から入る光によって明るく、脱衣所前廊下は屋根の開口から入る光によってやさしく照らしている。



富士の重なりから入る間接光によってギャラリー空間を全体的に明るく照らしている。

Phase.12: 浴室内部に落ちる神妙的な光の筋

銭湯空間の設計においては、壁面に反射したやわらかな間接光によって全体をやさしく包み込むような光環境を基本としている。夏至の正午12~13時の間に、計画的に設けた開口部から自然光が一直線に差し込み、浴場に美しい光の筋が現れる。この光景は1年に1度この日しか見れない。ご来光のように、空間の中に特別で象徴的な瞬間を生み出し、日常の中に小さな感動をもたらす。



夏至以外の日にちの同じ時刻でも検証した。しっかりと意図したように夏至のみ神妙な光の差し込みを見ることができる。